



正宗白鳥全集

第十卷

小説
十

福武書店

正宗白鳥全集第十卷

一九八五年二月二十日 印刷

一九八五年二月二十八日 發行

著者 正宗白鳥

發行者 福武哲彦

發行人 株式會社 福武書店

東京都千代田區九段南二二三二八

〒102 電話(03) 3301333

振替口座(東京) 六一〇五九七

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 六七〇〇圓

第十七回配本(全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集

第十卷

監	編	裝
修	集	丁
井	紅	山
伏	野	中
鱒	敏	島
二	郎	河
		太
		郎
	吉	登
	夫	

第十卷 小說十 目次

稻 妻

二

梅檀木橋

二三

三疊の間

二六

冬の日

二五

青年の権利

二五

ある銀行員

二五

乗合馬車

二七

屏 風

二六

迷 妄

二八

湖水のほとり

一八

復活

一九

ある田舎商人

二〇

慾と慾

二三

ある嫉妬

三四

馬鹿の清吉

三三

亡夫の情人

三四

二人の青年

三三

東京

三七

人生五十 三二

虐げられる 三三

二十代 三六

山の茶店 三六

水泳場 三二

生まざりしならば 三六

クリスマスとお正月 三七

父の嫉妬 四二

象牙の塔 四三

肉 親 四三

御先祖様のお墓 四一

若 者 四六

女三人 四四

平凡人 五六

解 題 紅野敏郎 五三

小
說
十

稻 妻

一

御殿場あたりから假寝うたたねをしてゐた唐山香一は、汽車が國府津に着いた時、あたりの騒々しい物音で目を醒さまされた。今まで空いてゐた二等室も、大分立て込んで來たと思ひながら、何氣なく車内を見廻したが、すると、ある知人の横顔が目についたので吃驚びっくりした。暫らく東京を遠ざかつてゐて、歸りがけに知人に會ふのは懐しい譯なのだが、この知人に對しては、彼れは一種の恐怖を抱いてゐるのであつた。

で、成るべくなら此處で下車して、一汽車遅らせた方がいいと思つて、身仕度に取り掛つてゐるうち、汽車は用捨なく動きだした。帽子を目深に被つて身體を曲げて、相手の視線を避けるやうに努めてゐたが、さうしてゐるのも、次第に氣になつて心苦しくつて溜らなくなつたので、直截にそちらへ行つて言葉を懸けることに決心した。

顔色を和げて、夕刊を讀んでゐる知人の前に立つて、「暫らく御無沙汰をいたしました。」と挨拶をすると、

「これはお珍しい。……何處へ行つてゐました。」と、知人は意外な感じに打たれて香一を見上げて、「まあ此處へお掛けなさい。」と、肥つた身體を揺り動かして席を空けた。穩やかな態度を見せられてゐても油斷はならないと思ひながら、香一は空席に腰を卸して、煙草に火を點けた。

「胃腸を痛めましたので、二十日ばかり修善寺の温泉へ行つてゐました。」と云ふと、

「ホウ、それはいけない。私は日曜と祭日をかけて、箱根へ行つて來ました。頭を休めるのが目的だから、湯に入つては寝てゐたのが、昨日一日で眠きふが足りたものだから、今日は宮ノ下から上下とも歩いて湖水を見て來ました。湖水の眺めはなかなかよろしい。……あなたは箱根はよく御存じな筈ぢやな。」

「ええ。」香一は微かに答へた。思ひ出の多い箱根の地名を、この知人の口から聞かされるだけでも耳が痛かつた。

山上の秋景色や修善寺の昨今について、暫らく互ひに話を取り交してゐたが、やがて知人は嚴かな目付で香一を顧みて、

「あなたには何處かで一度お會ひしたいと思つてゐたのでした。今日この汽車に乗り合せたのは丁度よかつた。」と云つたので、香一は同車した不運を歎けながら、騒ぐ心を鎮めて相手の言葉に相應しい受け答へをしようと心構へをした。

「伸吾からもあなたにお話したさうだが、あの男は年齢が若いから言ふことが感情に走つていけない。あなたもお若いのだし、若い同士ぢや、話に角が立つて、圓滿な極りがつかなくなるのも致し方がないのです。それで、巴町でも私に間に立つて收めて呉れと頻りに頼んで來るので、私も迷惑しとるのですがね。しかし、親類の端くれだから、一概に斷る譯には行かないので、不承不承に引き受けた譯合ひなのだが、どうでせう。あなたは私と懇談をして下さるでせうかな。」

「そのうち、何處かで緩くりお目に掛ることにしませう。伸吾さんとも荒い口を利き合つた譯ぢやなかつたのです

よ。」

「いづれ緩くりお話をしなけりやならんが、今日は大變いい機會なのだから、大體のところでああなたのお考へを聞いて置きたいんです。實はな、今夜は新橋へ龜代が出迎へに來てゐる筈なのだから、あなたのお考へ次第で、直ぐにもあの女に會つて頂いて、私が間に立つて話を極めたいと思つてゐますのぢや。」

龜代が新橋で待ち受けてゐると聞くと、香一はギョツとした。行衛を晦ましてゐた罪人が、刑事探偵に注意深い網を張られてゐるやうな氣がした。逃げようとしてももう駄目だぞと、知人の目が光つてゐるやうに思はれた。が、押し詰められるとともに、反抗心が湧き出たので、

「伸吾さんにも申し上げてあるのですが、龜代さんには會はないことに話の決着がついてゐるのです。私の所行に過失があればお詫びします。責任も負ひますが、それは別の話として、龜代さんに會ふのどうのといふことは許して下さい。私の方ばかりぢやない。あの女からも、一生あなたに會はないといふ烈しい手紙を貰つてゐるのですから。その手紙はいつかあなたにお目に掛けてもよろしいんです。」と度胸をすゑて云つた。

「それは拜見しませう。しかし、あの女がその時々氣持

どういふ手紙を書いてゐようとも、昨今は素直な心をもつて、身内の者の意見をも容れて、正しい途を取らうとしてゐるのですから、あなたにもその心をよく酌んで頂きたい。若い人の過去の過失を咎め立てするやうな思ひ遣りのないことは、私はしないつもりぢや。世間の噂は當てにならないもので、龜代もあなたも悪者にされとるやうだが、これからの身の持ちやう一つで、下らない噂なんぞ奇麗に拭つてしまふことが出来るんです。譚を聞くと龜代も不憫だから、この頃は私の家に預つて、家事の手傳ひをして貰つてゐるんだが、氣をつけて見てゐると、案外に利口な女なので、私ども非常に感心してゐますのぢや。何しろ繼母に育てられたのだから、若くつても普通の女よりや苦勞してゐる。あの女になら、家をまかせても、今時の女のやうに無駄な金を使つたり、だらしない様をしたりする心配はありませんな。」

「實際私一人が悪かつたのかも知れません。罪は私一人が着て居なければならぬのです。」

香一の言葉は皮肉な調子を含んでゐなかつた。彼れは生眞面目にさう云つたのであつたが、罪や悪名は自分一人で背負つて些しも厭はないにしろ、ただ龜代との關係を續けるのはどうしてもいやであつた。正式に結婚して新たに世

帯を持つことなんか、彼れに取つては、以つての外のことであつた。去年の夏底倉に遊んでゐた時、ふとした好奇心から起つた龜代に對する戯れの戀は、周圍の面倒な事情のために却つて油を注がれて、一年近くも續いて來たものの、牡丹に譬へてもいゝやうなTといふ婦人と、新たに親しみだして、戀の芽の日に日に萌でゐる今は、一時の出來心に過ぎなかつた龜代との關係などは、思ひ出すだに、殺風景で薄汚らしかつた。世帯持ちがいゝとか世事に明るいとかいふことも、若い日を樂まうとしてゐる今の彼れにはどうでもいいことであつた。他の男と婚約のあつた龜代を誘惑したと云つて、先方の身内や自分の親兄弟にさんざ責められて虐められて、そのために自分の大切な若い身體を害ねたのだから、大抵な罪亡ぼしはされてゐる譚だとも思はれた。

面倒くさい思慮は兎に角、Tは今夜東京驛におれを出迎へに來てゐるのではないか。……香一はさう思ふと、若い知人の世迷言なんぞを殊勝らしく聞いてゐるのが馬鹿らしくてならなかつた。

知人は今日の好機會を取り逃がさないやうにと、堅く定めて、龜代の家の事情や、婚約のあつた男との縁を切つたことや、乗りかゝつた船だから自分は此處を圓く收めて、

龜代と香一との後援となつて、將來までも二人のために盡す決心をしてゐることや、どちらかが無責任なことをすれば黙つて見てはゐないといふことなどを諄々と話して、舊したり賺したりした。

香一は簡単に氣のない返事をしながら、窓の外を顧みたり、いろいろな乗客に目を注いだりしてゐた。刈穫時の黄ばんだ田や、野菜畑の上に照り渡つてゐる冴えた月の光りは、この世のものとは思はれぬほどに美しかった。彼れは汽車の進行を恬恬しく思つたり、東京へ早く近づくの却つて氣遣つたりした。新橋驛には、頬骨の尖つた、顔までも理窟つばい龜代が待つてゐる。東京驛には、牡丹の花のやうな丁が待つてゐる。……彼れが二人の幻を目前に浮べて見詰めてゐると、

「ぢや、とに角、私と一緒に新橋で下りて下さい。鳥屋へでも寄つて晚餐を食べながら緩くりお話しませう。」と、知人は命令的に云つたので、香一はふと夢から醒めたやうに、

「私は今夜早く家へ歸らなければならぬのです。家には兄もゐるのですから、あなたから兄によくお話しして下さいませう。」

「先づきも云つたやうに、兄さんには一度お目に掛つてゐ

るんだが、兄さんは當人まかせだと云つて取り合つて下さらない。兄さんは龜代を誤解してゐなさるらしいので、あなたの方から事を極めてかからなければ話がしにくいのです。」

「私は兄を差しおいて、獨斷で話を極める譯には行きませんよ。」

「完全に話を極めないまでも、今夜は隔意なく打ち合せをしたいと、私は思つてゐるのだが、あなたはそのまま無責任に打放つて置かうと云ひなさるんですか。」

知人は左右の乗客に怪しまれるのも構はず、氣色ばんで聲を強めた。香一は相手にならないで黙つてゐたが、そのうち汽車は品川に着いた。次の驛が新橋だから知人を離れて逃げ出すなら此處だと思ひながら決行しかねてゐると、ふと艶やかな丁の顔が入口のところから現れた。彼女に違ひないので、香一は思はず座を立つたが、香一を見當てた彼女は、ニツコリして近寄つて、「時間が早過ぎたから、停車場で待つてゐるのも詰まらないと思つて、此處までお迎へに來ましたの。だいぶお肥りなすつたわね。」と馴々しく云つて、側の空席へ腰を卸した。

香一は顔を紅らめてドキマギしてゐたが、かの知人の目は儼しくなつた。二人の様子に氣づいた丁は間の悪い思ひ